巻頭言

除草剤の新たなコンセプト

財団法人　日本植物調節剤研究協会　会長　**小林　仁**

昨年４月にベンタゾンが「大豆バサグラン液剤（ナトリウム塩）」として農薬登録された。

ベンタゾンは，品種によっては初期薬害症状がかなりの程度発生するために，長年にわたって大豆栽培での実用化が見送られてきた除草剤だ。しかし，近年における水田転換作物としての大豆栽培の拡大に伴い，現場から広葉雑草防除対策が切望されたため，登録に踏み切られた。切羽詰った背景があったにせよ，薬害の懸念が残るベンタゾンが新規に登録されたことは，わが国における今後の除草剤の開発・普及にとって画期的なことである。この除草剤は使用方法を誤れば薬害によって減収するおそれがあるが，適正に使用すれば大幅な省力化を図ることができる。ベンタゾンの有効利用のためには，現場に近い公的研究機関での試験データの蓄積や指導体制の強化が不可欠とされているが，同時に農家の使用責任が著しく増大したと云えよう。農家がこれまで抱いていた除草剤に対する意識改革が必要である。

日本における除草剤開発が始まって半世紀。この間に開発された除草成分・剤型は地域や目的に応じて実に多様である。しかし，諸外国の場合と比べて日本の農家の除草剤に対する要求にはかなり違った厳しさがある。日本の農家は，たとえ薬害が速やかに回復して最終的に収量に悪影響が及ばなくとも，作物に対して初期の薬害が生じるような薬剤を敬遠してきた。また，実用上の問題が生じなくとも，雑草が僅かでも残存するような除草剤は気に入ってくれないのである。このような除草剤に対する意識は長年にわたる伝統や風土によって培われてきたのであろう。

除草剤に限らず，農薬や遺伝子組換え作物に対する日本人の感覚も世界の常識とは相当隔たりがある。数十年にわたって除草剤を利用してきた人に，「このまま使い続けても子々孫々に悪影響は出ないだろうか」としばしば尋ねられる。各種の検定試験によって安全性が保証されていると伝えても，なかなか安心してくれない。遺伝子組換え作物についても同様である。科学的に安全性が保証され，諸外国で大量に消費され，更に健康上のトラブルが皆無であることが分かっていても日本人は納得しない。養老孟司著「バカの壁」の記述にもあるように，日本人が思いこみによって作っている壁はかなり厚いようだ。

これに関連して，２０年以上も前のことになるが，ブラジルの日本人移住者のコショウ畑を見に行ったときのことを思い出した。そこでは何十ヘクタールもある広大な土地にコショウが整然と植えられており，草一本ないようにきれいに管理されていた。しかしよく見ると，肝心なコショウの樹の生育が芳しくなく，中には枯死寸前の樹も散見された。一方，その近くにドイツ人移住者が栽培しているコショウ畑があった。そちらは対照的に裸地が全くなく，下草が繁茂していた。全体的に雑然としていたが，コショウの樹の生育は旺盛で，明らかにこの畑のコショウ収量は日本方式のものをはるかに凌ぐように見受けられた。日本人の潔癖性と勤勉性が裏目に出ている状況を目の当たりにして衝撃を受けた瞬間であった。

文化や芸術の面での多様化は歓迎するが，科学・技術の面ではグローバル・スタンダードに収斂することが望まれる。非科学的な伝統や風習に縛られていては，世界の潮流に乗り遅れてしまう。

ベンタゾンの新規登録を契機に，日本における除草剤のコンセプトが世界の基準に接近することを期待したい。